
幻想物語 双剣士の少女

神無瀬羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想物語 双剣士の少女

【Zコード】

Z6921

【作者名】

神無瀬羅

【あらすじ】

普通の少女だつた私が目覚めた先は……樹海の中？　と言つかっこどこなの？　いきなり狼に襲われて戦うはめになるしも足噛まれるし本当に最悪。

幻想物語シリーズ 第一ストーリー 双剣士の少女をよろしくお願いします。

三覚のわが樹海の中（前書き）

えーと、これでは初投稿ですが、よろしくお願ひします。

「」んにちわ、この作品の主人公をやらしていただいてる者です、普通の少女だつた私はなぜか、こんな樹海に飛ばされたけど、本当にどうよこ？ともかく、これからよろしくお願ひします」

田原の森の中

「昔から面倒な事は大ッ嫌いなのに……こつもこつもビーッとして巻き込まれるんだが……」

今、私は森の中で大きく愚痴っていた。森の中と言つても日本にある様な小さな森では無くて、正に樹海とも言える大きな森の中である。

なんで、私はこんな場所にいるんだろう、記憶の最後には確かに家中でグッスリと寝た覚えがあるのだけど、起きて見れば訳も分からぬ樹海……。

「一番最初に思いつくのは私の見てている夢なんだけど……」

手の感覚はある……、意識もはつきりとしているし、何よりも私は今、言葉を話せている。

夢の中って話したり考えたりがほとんど出来ないし、この状況下でここまで考えられるんだから、夢つて事はまずありえない。

「私……なんでこんなに冷静になつていられるんだろう」

いや、昔らしがだつけ、車に轢かれた時も道路に倒れながら、道路冷たいなあとか考えてたし、周りから悪口とか陰口言われても、感情的になつた事も無い。

「はあっ……、けど、流石に荒つよつと私

樹海と言つ場所は確實に危険がある。夜に成れば迷う事になるだらうし、毒を持つ生物も多数存在する。そんな中、私がどうして、自分に対して慌てようつと言つたのかは簡単だ。

どうしよう、この狼っぽい奴等の群れ……。

ガルルルツ！！

「ほら、私は美味しくないわ、見て分かるでしょ？ 皮と骨と水分ぐらーしかないから」

言葉が通じるはずも無いのだけど、なんとなく言つてみた。無論通じるはずも無く、狼達は私を少しづつ囮もうとして来ていた。

数は三四で、全員、犬と同じぐらいの大きさ、火があれば追つ払えるんだけど、そんないいものは私はもつて無い、これが熊だったり、眼を合わせながら後ろに下がつていけばいいけど、狼相手にそれは無意味だと思つ、だつて明らかに私を食べようとしてるし……。

「流石に拙いかも……夢かどうかは分かんないけど、喰われるのは勘弁してほしいな！」

もう考てる暇は無い、狼達はすぐにも飛び付いて来そうだ、覚悟を決めて遺るしかない。

近くにある武器は少し長い木の枝、これを使ってどうにかするしかないよねっ！ 私は木の枝を掴み取り、一気に樹海の中を駆ける！

ガアアアアアアツ！！

狼達が後を追う様に樹海の中を駆けて来る。やっぱ逃がしてくれないか、それに走りづらくて仕方ないし、狼の方は逆に慣れてるみたいでかなり近寄つて来るのが早い！ 私はすぐに逃げる事を明らかに、飛び付いて来た狼の一匹の頭に木の枝を叩き付けた。

「まず一匹」

バキと詰う音と共にキャインと言う狼の小さな叫びが響き、残つた一匹の間に倒れ動かなくなつた。氣絶してくれたのかな？ けど、まだピンチな事に変わりは無い、唯一の武器であつた木の枝は折れた。

こんな短い枝じゃ役にたたないよね 、あ、そうだ！

「二刀流なんてね」

折れた枝を拾い上げて、私は両手に木の枝を持つた。無駄に格好つけて見たけど、まあ、ないよりはマシだよね。

ガルアアアアアア！！

残つた一匹の狼は怒りの雄叫びをあげながら私に向かつて飛び掛る。私は反射的に左手の木の棒で手前の狼の爪を弾き、右手の木の棒でもう一匹の狼に向かつて突きを放つ。

「え？ あれ？ どうして？」

今私の動きは可笑しい、まるで流れる動きで片方の狼を押さえ、もう片方の狼を突きで気絶させた。

けど、こんな事を考へてゐる間に左手の木の棒で弾いた狼が真下に入り込み、私の足に噛み付く。

「つあ！ 痛いっ！」

「これでこれが夢でない事が証明された つ！ なんて暢気な事言つてる場合じゃないっ！ い、痛いやめてよね、私は別に痛いのが好きな変体でもなんでも無いの！」

「あ、ち、力が入んない」

……なぜか体に力が入らない、これつてもしかして毒？ そんな、こんな意味の無い所に連れて来られて、狼に襲われて、それで狼の餌になるの？ やだ、そんなの絶対やだっ！ けど、力が入んな……い。

「だ、誰か助けて」

私が必死に小さな言葉をあげたその瞬間、シユツと音と共に狼の頭に何かが突き刺さった、そして、誰かが狼の体を蹴り飛ばし、私の体を持ち上げると駆け出し始めたのだった。

私は意識を保とうとは思わなかつた。それは体が人と言う温もりを感じていたからだつた。

よかつた、助かつたみたいで……。

三 覚めなれぬ海の中（後書き）

「まだ、私の名前が出ていないから元気に出せないじゃなく、もうや
りと叶っていない？」

次の時に出すから、許して？ ね？

「仕方ないなあ……、それじゃ、またね」

兄と私

「お兄ちゃんはどうしているの？」

それは小さい頃、私が毎日感じていた疑問だつた、私の兄は外に出る事は無くいつも家の中に居て外に出る事は滅多に無かつた。

「ふむ、その言われ方だとまるで僕の仕事が自宅警備員だと思われそうだな」

兄は本がとても好きで部屋はまるで書庫の様になつてゐる。そんな兄は既に十八歳で大学には行かず高卒だつた。

「そうだな……僕は待つてゐるんだ、友人が来るのを」

「毎日？」

「ああ、毎日だ」

兄はその友人と約束でも交わしたのだろうか？　だけど、兄の雰囲気を見るとそつとは思えない、けど、嘘を言つてゐる様にも見えなかつた。

「お兄ちゃんは不思議だよね、いつも変な事ばっかり言つてゐる」

「そうか？　まあ、そうかも知れないな」

そう言いながら首を傾げながら兄は小さく笑い、私の頭を優しく

撫ぜるとそのまま一階に行ってしまった。

「私はもう子供じゃないのに……」

まあ、悪い気分では無かつたから、頭を撫ぜられるのも……。

けど、翌日、兄……神月瀬羅は唐突に行方不明になる。私……神月瀬羅は必死に兄を探したが結局は見つからず、そして。

「ん…………あ？」

「田覚めたか？」

さつきのは夢？　ああ、お兄ちゃんが居なくなつた日の事ね……。

「貴方、さつき私を助けてくれた人？」

「ああ、ウルフの群れに襲われる所を眺めてたんだがな、危なそ
うだから助けた」

つまり、貴方……いや、アンタは人が襲われるのを高みの見物
していたと？

「一度、殴つていい？　ねえ？　いいよね？　人が必死に逃げてた
のに眺めてたんでしょう？　あの狼、もといウルフだけ？　簡単に
倒したんだからいつでも助けられたはずだしつ！」

ハツ当たりだと呟く事は理解していた、あの時、助けて貰わなければ私は今頃ここには居ないし、きっとウルフの餌になっていただろつ。

「それだけ元気なら大丈夫だな、殴りたいなら殴ればいいだろつ、それに一言言わせて貰うが、準備も無しに魔物が住む森に入る奴に言われたくは無い」

「うつ、と私は言葉に詰まる。私はここに連れてこられたとしても、自分の意思で来なかつたとしても『コイツの言つてる事はここでは普通の事なのだろつと思つ。

「はいはい、ありがとうございました、それでここはビリ？ ちなみにアンタの名前は？」

「ここは町外れにある森で、ここは俺の家だ、名前はガルム＝ステッドだ」

「私はセラ＝カンヅキ、此処から町つて歩いてビのへりかかる？」

名前が外国風なのに、言葉は日本語、コイツが私に合わせてる可能性はまず無い、とすれば、在り得るのは異世界よね……本好きの兄に影響されて私も本は沢山読んだからなんとなく理解できた。

「歩いて二日だな、ちなみに休まず歩いてだ

「は？ はあああああ？！」

私の目的、まずは町に行く……だつたけど、これは色々と大変そ

う
だ
つ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6921/>

幻想物語 双剣士の少女

2010年10月28日08時49分発行